

医療ルネサンス

No.6127



片頭痛治療の今

15/5

専門クリニックの必要性

片頭痛の患者は、最初にかかった医療機関で原因が分からなかったり、治療に満足できなかったりして様々な医療機関を回る。「ドクターショッピング」に陥るケースが少なくない。

東京都狛江市の保育士の女性(46)は、短大生だった18歳の頃に発症。しばらくは市販薬でしのいでいた。出産後の20歳代後半になると、症状がひどくなり、3

日間寝込むことも。「脳がおかしいのでは」と病院で検査してもらったが、異常は見つからず、そこで治療を終えた。その後、頭痛が起しても我慢を続けた。

それから5年後、目にキラキラしたのが見えた後、頭痛が襲ってきた。片頭痛に特徴的な前兆現象「閃輝暗点」だった。今度は目の異常を疑い、眼科を受診したが、原因は不明。その

後も症状が続いたため、別の眼科を受診したところ、ようやく片頭痛と診断され、頭痛外来のあるにわかアミリクリニック(調布市)を紹介された。

治療薬のトリプタン薬が効かなかったため、発作時は鎮痛薬と抗炎症薬を、日常は発作予防薬の処方を受付け、以前の吐き気を伴う頭痛はなくなった。発症から20年たった。



片頭痛患者に配慮した柔らかい照明の中で診察する丹羽さん—東京頭痛クリニックで

頭痛専門医で院長の丹羽深さんによると、欧州では、頭痛患者は最初に一般の診療所を受診し、そこで治療が難しい場合は、頭痛診療専門のクリニックを紹介される。それでも難しければ頭痛外来のある病院にかかると。一方、日本ではどこを受診するか患者の自由なため、かえって患者はどこにかかれればよいか分からず、複数の診療所を巡ったり、頭痛外来のある病院に集中

したりする原因となっている。

丹羽さんらは、身近に頭痛の専門治療が受けられる場所を作ろうと、「東京都渋谷区谷」を先月1日に開設した。片頭痛の患者が苦手なまぶしい光に配慮して診察室の照明の強弱を調整でき、色調も1600万通り変えられる。色の効果にはつきりとしたデータはないものの、茶色と灰色、緑色で患者が落ち着く傾向があるという。防音効果も高め、MRI(磁気共鳴画像装置)や頭痛を和らげるウォータベッドも備える。診察には丹羽さんら専門医4人があたり、開院から1か月で約2000人の患者が訪れた。

丹羽さんは、「頭痛の原因を見極め、患者ごとに合った治療が大切。適切な治療が行われるよう頭痛専門クリニックが増えほしい」と話している。

(原隆也)

(次は「心の健康を守る」)